

【公報種別】特許法第17条の2の規定による補正の掲載

【部門区分】第3部門第1区分

【発行日】令和2年1月30日(2020.1.30)

【公表番号】特表2019-502635(P2019-502635A)

【公表日】平成31年1月31日(2019.1.31)

【年通号数】公開・登録公報2019-004

【出願番号】特願2018-530539(P2018-530539)

【国際特許分類】

C 0 3 B 20/00 (2006.01)

C 0 3 B 37/02 (2006.01)

【F I】

C 0 3 B 20/00 A

C 0 3 B 20/00 C

C 0 3 B 20/00 F

C 0 3 B 37/02 Z

【手続補正書】

【提出日】令和1年12月9日(2019.12.9)

【手続補正1】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0093

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0093】

好ましくは、二酸化ケイ素粉末は、ヘキサメチルジシロキサン、ヘキサメチルシクロトリシロキサン、オクタメチルシクロテトラシロキサン、デカメチルシクロペンタシロキサン、テトラメトキシシラン、メチルトリメトキシシラン、四塩化ケイ素、ならびにトリクロロシラン、またはこれらの2つ以上の組み合わせからなる群から選択される化合物から、例えば四塩化ケイ素およびオクタメチルシクロテトラシロキサンから、特に好ましくはオクタメチルシクロテトラシロキサンから、調製することができる。

【手続補正2】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0338

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0338】

予熱加熱部

好ましくは、炉は、通路により互いにつながれた第1のチャンバとさらなるチャンバとを少なくとも有し、第1のチャンバとさらなるチャンバは、異なる温度を有し、第1のチャンバの温度は、さらなるチャンバの温度より低い。更なるチャンバの1つでは、ガラス溶融物が、二酸化ケイ素造粒体から形成される。このチャンバは、以下において溶融チャンバと呼ばれる。ダクトを介して溶融チャンバにつながれているが、溶融チャンバの上流にあるチャンバは、予熱加熱部とも呼ばれる。1つの例は、少なくとも1つの出口が溶融チャンバの入口と直接接続されているチャンバである。上記の配置は、独立した炉内に作製されてもよく、この場合、溶融チャンバは、溶融炉である。しかしながら、さらなる説明では、「溶融炉」という用語は、「溶融チャンバ」という用語と同一であると解されてよい。ゆえに、溶融炉に関して述べられることは、溶融チャンバにも当てはまると解されてよく、その逆もまた同様である。「予熱加熱部」という用語は、両方の場合に同じものを意味する。

【手続補正3】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0564

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0564】

f. フッ化物の決定

15 gの石英ガラス試料を粉砕し、硝酸中で70 で処理することにより清浄化する。次いで試料を高純度水で数回洗い、次いで乾燥させる。2 gの試料を計量してニッケル坩堝内に入れ、10 gの Na_2CO_3 および0.5 gの ZnO で覆う。坩堝をNi蓋で閉め、1000 で1時間ローストする。次いでニッケル坩堝に水を充填し、溶融ケーキが完全に溶解するまで沸騰させる。溶液を200 mlメスフラスコに移し、200 mlまで高純度水で充填する。未溶解の構成要素の堆積後、30 mlをとって100 mlメスフラスコに移し、0.75 mlの氷酢酸および60 mlのTISABを添加し、高純度水で満たす。試料溶液を150 mlガラスビーカーに移す。

【手続補正4】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0640

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0640】

j. 「使用済みの酸」(使用後のHF浴)

実施例Iにおける浸漬浴内の液体($V = 2 \text{ m}^3$)を、石英ガラス体(N-1')の処理直後に、さらなる処理なしに試験する。上記の処理のために用いる液体は、処理前および処理後に、表20に示す特性により特徴付けられる。

【手続補正5】

【補正対象書類名】図面

【補正対象項目名】図11

【補正方法】変更

【補正の内容】

【図11】

